

ちひろ美術館・東京  
美術館・友の会だより

No.157

2008.2.25



## ちひろ生誕90年記念展 ちいちゃんの絵本

●2008年3月1日(土)~5月11日(日)

「もう ひとつ ねると  
ちいちゃんの おたんじょうび  
おかあさん  
わたしが うまれたとき

ゆきが ふってたって ほんと?」

これは、絵本『ゆきのひのたんじょうび』の冒頭のことばです。ちひろの生まれた1918年12月15日の福井県武生市(現・越前市)でも、雪が降っていたといいます。「ちいちゃん」は、ちひろの子どものころの呼び名でもありました。

絵本は、ちいちゃんの心の動きを軸に展開していきます。自分の誕生日を明日に控えてはりきっていたちいちゃんは、友だちの誕生会でうっかりケーキのろうそくを吹き消してしまいます(図1)。みんなにひやかされてしょげてしまい(図2)、友だちも誕生日も、なにかもかがいやになってしまった彼女が、ただひとつ願ったのが、雪が降ることでした。そして、次の日の朝——願いがかなって、雪の日の誕生日がはじまります(図3)。この絵本には、子どもの抱く期待や喜びとともに、立ち直れないほどの自己嫌悪や、だれにもわかってもらえない寂しさまでもが描き出されています。けなげで繊細なちいちゃんをみていると、ちひろその人の人柄も偲ばれます。

1968年の『あめのひのおるすばん』以後、『あかちゃんのくるひ』(69年)『となりきたこ』(70年 図4)『ことりのくるひ』(71年)『ゆきのひのたんじょうび』(72年)『ぼちのきたうみ』(73年)

と、ちひろは亡くなる前年まで、毎年1冊ずつ至光社から絵本を發表しました。ちひろの分身のような女の子を主人公に、絵も文も手がけたこれらの絵本は、「感じる絵本」と呼ばれ、当時の主流であった物語絵本とは異なる、新しい絵本の可能性を開きました。

感じる心は、全ての人が生涯持ち続ける子どもの心に根ざしていると、このシリーズの共同制作者である編集者・武市八十雄氏は語っています。感じる世界を描くにあたって、武市氏はちひろに多くの示唆を与えました。感じることは理解することとは違うから、説明せず、最小限の絵とことばで暗示しよう。不完全だけど充分なものにしよう。勢いを大切にしよう。そのためには、太い筆を使い、時には立って描いてみてはどうだろう——。毎回5日間くらい熱海ホテルにこもって行う制作を、ちひろは「絵本づくりの実験劇場」とよんで、楽しみにしていたといいます。もみ紙やパステルなどの画材の実験や、印刷の段階での合成・反転なども積極的に行いました。この絵本づくりをきっかけに、1960年代末から70年代にかけて、ちひろの画風はより伸びやかで、叙情的なものへと変化を遂げていきました。

また、甘い絵といわれて悩むこともあったちひろを、かわいく美しいものに自然に目がいくのは天性の資質なのだから、その道を徹底して進もうと武市氏は励ましました。ちひろが絵本のなかで、自分

のなかの「子ども」を生き生きと表現できたのは、そんな編集者との出会いがあったからこそといえるでしょう。

『ゆきのひのたんじょうび』を描いた当時、ちひろは衆議院議員の夫と受験期の息子、両家の母親のいる家族を主婦として支えていました。忙しく、体調も崩しがちな日々でしたが、この絵本のことを考えているときは、ほっとして楽しい気持ちでいられたといいます。ちひろはこの絵本に寄せた文章のなかで、次のように語っています。「……なつかしい、やさしい、人の心のふる里を探します。絵本の中にそれがちゃんとしまっているのです。……この“絵本のしあわせ”がみんなの心にとどくように、もし私が死ぬまでこうして絵本をかきつけていけたとしたら、それは本当にしあわせなことです」。

生誕90年を記念する本展では、絵本『ゆきのひのたんじょうび』を中心に、『あめのひのおるすばん』『となりきたこ』『ぼちのきたうみ』の原画や習作を展示します。また、息子や身近な子どもたちを描いたスケッチ、絵雑誌などに発表した中期童画、後期の代表作など、初期から晩年までの作品を展示し、生涯のテーマとなった「子ども」の表現の変遷をたどります。大人になって知識や経験を積むにつれて見失いがちな「感じる心」を、大切に持ち続け、晩年になってますます鮮やかに描き出した、ちひろの画業をご覧ください。(上島史子)

## ●多目的展示ホール

## &lt;企画展&gt;ちひろ美術館コレクション展 I ロシアの絵本

●2008年3月1日(土)~5月11日(日)

世界29カ国172人の画家による16600点にのぼる世界の絵本画家のコレクションのなかから、ロシアの絵本画家の作品を資料とともに紹介します。

1200年以上の歴史と100以上の民族からなるロシアには、昔話や民俗芸術の豊かな伝統があります。19世紀末から20世紀前半に活躍したビリーピンは、同時代のユークラシエフの様式とともに、自国のイコンや民衆版画の手法を取り入れて昔話を描きました(図1)。

革命と内戦を経て世界初の社会主義国家が誕生したのは1922年。次代を担う子どもの育成に力を入れ、国立出版所児童書部には、才能ある作家や画家が集められました。E.チャルシンもその一人で、

動物や自然を親しみやすく描きました。この時期、社会への理想に燃えた作家たちが作った斬新で実験的な絵本は、他国の画家や絵本にも影響を与えました。

しかし、スターリンが独裁体制を強化し、1934年には国策に沿った内容の写実的な表現のみが政府公認の芸術と定められ、絵本の検閲も厳しくなります。そのなかで、自国の文化が失われていくことに危機を感じたマーヴリナは、古い町並みをスケッチし、工芸品や民衆絵画を模写して、これらを伝えていくことに専心します。検閲が緩和された1950年代から本格的に絵本制作に取り組んだマーヴリナは、これまでの探究を基に、鮮やかな色彩とのびやかな筆致で昔話「イワン王

子と灰色の狼」(図2)などを描き、ロシア民衆の心をいきいきと蘇らせました。

多彩なロシアの昔話のなかには動物を主人公にしたお話も多くあります。ラチヨフは、動物たちを表情豊かに性格づけし、ロシアの伝統的な衣装を着せて、身近な存在として描きました。絵本『てぶくろ』(図3)は、日本でも出版以来、四十数年を経た今も愛され続けています。

ロシアでは昔話のほか、寓話にも動物たちが多く登場します。ポポフは、動物を擬人化して風刺したクルイロフの寓話集の絵を、ソ連崩壊直前に描いています。社会へ向けられた画家の鋭いまなざしにより、19世紀初頭の寓話に新たな光が投げかけられています(図4)。(原島恵)



図1 「ふっ たいへん まちがっちゃった  
あーら あらら  
ちいちゃんたら けしちゃった  
ひどの ろうそく けしちゃった  
じぶんの たんじょうびじゃないくせに」

図1～3 『ゆきのひのたんじょうび』  
(至光社)より 1972年



図2 「ちいちゃんたら どうして  
そんなに げんきがないの  
さあ あしたは あなたの  
おたんじょうびよ」



図3 「さあ ゆきの たんじょうびです あかい ぼうしと  
てぶくろだって おかさんから もらったの」



図4 『となりにきたこ』(至光社)より 1970年

「おかあさん おこってたでしょ」  
「だいじょうぶさ それより あそぼうよ」



図5 「ほうそうごっこ」1958年



図6 青いつば広帽子を持つ少女 1969年

多目的展示ホール



図1 資料 イワン・ビリーピン  
『イワン王子と火の鳥とはいろいろの狼のおはなし』  
1901年初版 国立造幣局



図3 エフゲーニー・ラチョフ  
『おしゃれぎつね』1950年 『てぶくろ』より  
\*この作品は3月1日から4月6日まで展示する予定です。



図2 タチャーナ・マーヴリナ  
『狼に乗って空を飛ぶイワン王子』1950年



図4 ニコライ・ポポフ  
『狼とカッコウ』1989年  
『クルイロフ寓話集』より  
1813年にI.A.クルイロフが発表した寓話。狼が新天地を求めて出発しようとしているところに、カッコウが、「攻撃的でひねくれた性格のままではどこへ行っても争いがおこるだろう」と狼に忠告するお話。ナポレオンが1812年にロシアに侵攻したが、捕虜を残したまますぐにフランスに逃げ帰ったことを風刺したもの。

本展覧会では、イワン・ビリーピン、エフゲーニー・チャーレンシン、タチャーナ・マーヴリナ、エフゲーニー・ラチョフ、マイ・ミトゥーリッチ、ニキータ・チャーレンシン、ボリス・ディオドロフ、ニコライ・ポポフ、ヴィクトル・ドゥヴィードフの9人の画家による作品約50点と資料を展示する予定です。ラチョフによる『てぶくろ』の原画は全部で6点展示しますが、作品保護のため、3点ずつ入れ替えて展示いたします。

## 2007年10月14日(日) 開館30周年記念連続講座Ⅱ 武市八十雄 「絵本の子ども…ちひろさん」

ちひろの絵本の中でも大きな位置を占める至光社の「ちいちゃんの絵本」シリーズ。ちひろと共に、絵で展開する新しい絵本作りに取り組んだ絵本制作者・武市八十雄氏のお話の一部を紹介します。

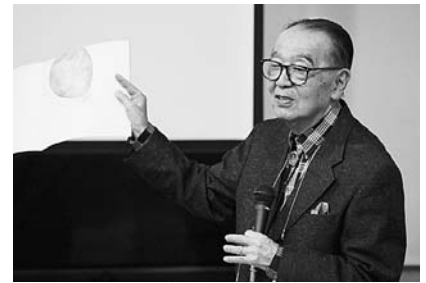
『「これは黒船の到来よね。やっぱり危機感がないわ。』ちひろさんは即座にそう答えられた。私が1967年に初めて海外へ絵本を持って出た時、向こうの編集者達に言われたんです。『我々にはテレビの出現とあいまって絵本はもう駄目じゃないかと危機感があって、絵本でなければできないものは何なのか真剣に悩んできた。日本の絵本はきれいなだけでその悩みが無い。おめでたい限りだ。』と。二人で絵本でなければできないことをやってみよう、と最初に取り組んだのが『あめのひのおるすばん』です。』

『「オープン戦よね」って。二人とも野球が好きで話が早いものですから、野球用語が、ずいぶん制作に役に立ちました。』

『「風船一発、これだけでいいよ」って僕がサインをおくる。風船が飛んでいく場面、ほんとは子どもの顔や家や街もあった。でもふっと思ったのです。白い画面は余白じゃない。白はほんとに力があるんだからって。この絵は無意識に描いたからいい。最初から風船だけで行こうと思ったら緊張してこういうものは出ない。』

『「立って描くのは子ども時代以来。こんな太い筆初めてだけどやってみるわ。』『私ね、この感じ取り戻した。小学校の頃、学芸会の前に「ちいちゃん、ちょっと描いて」「はいはい」って。』描くのが楽しくてしかたなかったその頃の自分を、ちひろさんは取り戻したんですね。』

『「子どもの頃、紙が無くて、ひどい時はちり紙みたいなしわくちゃな紙にも描いたの。』ってちひろさん。『それだ!』あやめが雨に濡れている場面にはそれしかない。紙をしわくちゃにして描いてみたらおもしろい。



ろい。製版の時に、白いところは飛ばして色のところだけを印刷しました。「黒船の到来」なんだから道を拓かなきゃならない、そういう意気込みで、当時の印刷技術としては不可能に近いことをやりましたね。』

「禅に“惜捨”という言葉があります。普通はいい物を残して悪い物を捨てるでしょ。“惜捨”は違う。たとえ良いものでも、この際は使わない。制作の時、ずいぶんこの言葉を使いましたね。』

「絵本の実る土台としては「感じる」ということを重んじました。ちひろさんの作品がこれだけ受け入れられるのは、ご本人が感じる世界の絵本の子どもそのものだったからです。』 (川添さやか)

## 2007年11月26日(月) 生誕110年記念 初山滋大回顧展 オープニング・レセプションとパーティー

開催にあたり、ご尽力頂いた遺族の初山斗作さんをはじめ、編集者や取材陣など、約60人が参加し、オープニングレセプションが開かれました。その席上、松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)は、「初山滋の原画にふれたとき、作品の持っている美しさがこれほど素晴らしかったのかと感激し、なんとしても展覧会をやりたいと願い、10数

年を経て、ようやく叶いました。多くの方々々に足を運んでいただき、初山の作品が、もう一度、世界に広がっていけば、これほど嬉しいことはありません」と挨拶。参加者からは「まったく古さを感じさせない」「想像以上に美しい作品」などの声が多数聞こえてきました。

(北村千恵)



レセプション風景

## 2008年1月6日(日) 「初山滋大回顧展」関連イベント 講演会 上笙一郎「初山滋の世界」

多くの子どもの本の画家たちに直接会って話を聞き、『聞き書き日本児童出版美術史』を出版している児童文化研究者、上笙一郎氏。初山に直接会ったときのエピソードなど、上氏ならではの興味深い話をうかがうことができました。その一部をご紹介します。

### □ 初山滋との出会い

「最初の出会いは、丸善版『小川未明童話全集』(昭和2年刊行)です。箱の絵は武井武雄で挿絵が全部初山さんです。その頃はオフセット印刷はなく、絵描きか描いた元絵を画工がひとつひとつ石板の上に書き写すわけです。そうすると描き写す人の力量によって原画が変わってしまうんです。単色の線画は描いたものをそのまま写真にとって鉛板にするので、初山さんの筆致がよくでている。その頃私は中学2年生。絵描きの名前までは憶えなかったけれど、なんだか惹かれるも

のはあったことを憶えていました。児童文化の研究をしようと思った23歳のとき、ああ、この絵は初山滋という人の絵だったのかとあらためて認識したんです。』

### □ 人間・初山

『「日本児童出版美術史」をつくる時、直接話を聞きに行きました。初山さんに実際に会うまでは、洒落たアールヌーボー風の画の印象から、もしかしたらフランス辺りに留学した人かとも思っていました。初山さんっていうのは、きっと西洋風のスマートな人なんだろうと思って、練馬の豊島園の近くにあった家に恐る恐る行ったんですよ。そしたら、汚い寝巻きを着て懐に鳥の雛を入れたおじいさんがでてきて、「初山はおれだよ」っていうんですよ。本当に驚きました。いきなり一升瓶を出してきて茶碗に酒を注がれて飲まされて。それから2、3回通って雑談のなかで聞いたことをまとめました。』

### □ 初山の評価

『「初山滋の世界 コドモノクニの頃」に、初山さんの絵は近代美術における“幽玄”の開花だと書きました。言葉で言えないことを短い言葉や他の表現でもって説明するんじゃなくて、感じさせるというのが幽玄なわけですけど、私は、初山の本質はそれだというふうに評価したんです。』

「初山さんの追悼文にこのように書きました。“法隆寺という建築は疑いもなく一個の芸術だが、あれを建てた棟梁は恐らく自分を芸術家などは思っておらず職人だと思っていたでしょう。彼が職人としての自己の最善を尽くしたまさにそのことによって法隆寺は芸術作品になった。初山の場合もまた同じであって、貧苦にめげることなく、ひたすらに自己の仕事に打ち込んだ、そのことによって他の何人の追隨も許さぬ高度にして独自の童画技術を創造しえたのである。」(阿部恵)

## ひとこと ふたこと みこと

**2007年12月2日(日)**  
今日はどうしても行きたい!と、何か背中を押されるように来ました。自分が小学1年の時の教科書や私のために母が用意してくれていた絵本の数々に再会…母に愛されていたことを今あらためて感謝しました。私も娘をもっともっと愛していきたい、そう思いました。

**12月9日(日)**  
他にも美しい絵を描かれる方はいますが、初山滋の絵だけはどのようにしてこんな風に描けるのか、その着想が手の届かないところにあって、見るたびに息をのみます。

**2008年1月2日(水)**  
私は幼稚園の頃「ききみみずきん」しか借りませんでした。母に「今日は違う本を借りてくるのよ」と言われても「ききみみずきん」を又借りてきました。「うりこ姫と

あまんじゃく」を毎日父母に読んでもらい、同じ所で「キャー」と言って布団に潜りこみました。その本にここで会うとは、廻り合わせの不思議を思います。ありがとうございました。(近江)

**1月5日(土)**  
ただただ感激しています。子供の頃から初山滋の絵が好きで飽かず絵本を眺めていました。練馬の地に家を持ちましたら、近くに初山氏の表札を発見し小躍りしました。2度ほど氏の小枝を運ぶお姿を拝見しました。白髪と澄んだ大きな瞳は今でも心の奥に焼きついております。生きていて良かったです。

**1月8日(火)**  
練馬の幼稚園に通っていた時、毎週土曜に初山先生が絵を教えに来て下さいました。「クレパスより

絵の具で大胆に描きなさい。はみ出してもいいんだよ」と指導して下さった記憶が蘇りました。

(練馬区、合田)

**1月11日(金)**  
十勝からとんで来ました。初山滋の絵は学生時代から大ファンで、原画を見ることが叶い大感激。淡い水彩とモダンな線描の代表作はいうまでもなく「彫り進み」という技法や「もす」の木版画を見て、心底「絵描き魂」を持った人だったのだと益々心惹かれました。

(十勝、北村)

**1月16日(水)**  
ちひろさんの絵の美しさにうっとりし、初山滋さんの色彩にもうっとりしてしまいました。こんな絵を描いていた方がいたのですね。ちひろさんが魅かれたのはとても自然なことのように思えました。



## 美術館 日記

**2007年11月26日(月)** ☀  
「初山滋大回顧展」のオープニング・レセプション開催。(p.4参照)

**12月8日(土)** ☀  
竹迫祐子安曇野館副館長によるスライドトーク。企画展の見所を80枚を越すスライドと共に紹介。

**12月14日(金)** ☀  
一人でも多くの方に、これまでの活動を知ってもらいたいと、HPに、「ちひろ美術館の30年」のページを新設。30年誌、また30周年パーティーや感謝デイを取り上げた友の会通信の記事がダウンロードできるように。

**12月18日(火)** ☀  
朝日新聞夕刊be eveningにちひろ美術館のアトリエ写真が大きく掲載される。読者が決める「日本一」シリーズ。今回は「行ってみたい絵本美術館」。回答総数者

の半数以上を得ての、ダントツ一位に。来館者からも「おめでとうございます!」と声をかけられ、職員もうれしい限り。

**2008年1月6日(日)** ☀  
NHKの新日曜美術館のアートシーンで、「初山滋大回顧展」が取り上げられ、朝から多くの問い合わせの電話が。夕方からは、上笙一郎講演会を開催。(詳細はP.4)

**1月13日(日)** ☁  
子供向けのお話し会などを開催している「おはなしきやらぼんセンター」が、ラオスの絵本画家ヴォンサヴァン・ダムロンスクさんを連れて来館。駅で美術館の広告をみて、「是非行ってみたい」とおっしゃったそう。ラオスは出版事情が悪いため、ラオス語の絵本自体が少なく、NPOの活動でも翻訳出版を支援しているとのこと。子

どもが当たり前で自国語の絵本を好きなように読めるのは、恵まれた環境なのだと実感。

**1月17日(木)** ☁  
祖父が出したファンレターをきっかけに、祖父と初山に交流があり、版画集が家にあるという大学生が山形から来館。「早くに父を亡くした祖父を、親のような存在で、可愛がってくれたそうです」と語る。

**1月24日(木)** ☀  
展示アンケートを設置。会期終了を控え、多くのお客様が来館して下さり、回収率も予想を上回る。企画展の初山展が好評で、またちひろ作品の展示数もちょうど良いとの意見が多かった。

**1月27日(日)** ☀  
役員会で、安曇野ちひろ美術館の新収蔵庫棟建築案が承認される。(詳細は安曇野館の通信にて)



## 窓

### 平和だからできること

松本由理子(ちひろ美術館・東京 副館長)

開館30周年最後の展示は、生誕110年記念 初山滋大回顧展。「開催して下さってありがとうございます」の言葉が嬉しい。初めて出会った人も、原画を見るのを何十年も待ち焦がれていた人も、異口同音に「生きてよかった」「感動した」「原画をこんなにたくさん見られる奇跡に感謝」と記す。新しい作品でも40年、デビュー当時のものなら80年も時を経ているのに、みずみずしさに満ちている作品たち。遺族の方々が大切に保存し、貸して下さったおかげだ。

美術館の役割のひとつは、散逸しやすい文化財(当館では絵本画家の作品)を、でき

るだけ良い状態に保ちながら後世に残し、見てもらうこと。平和だからできる仕事だ。

初山と同時代に活躍した武井武雄の代表作の多くは、太平洋戦争の末期、東京の空襲で焼失している。ちひろの戦前の作品も油彩画が1点残っているだけで、あとはすべて焼けてしまった。「無言館」の画家や画学生のように、戦争に連れて行かれたまま、生きて還ることすら出来なかった人もいる。

戦時下では国策に協力的でなければ仕事もこない。紙も絵の具も配給されない。初山の、子どもの本の画家としての空白期は、表現者の心に蓋をし、内面の自由をも奪う

戦争という時代の恐ろしさを教えてくれる。

第二次世界大戦終了とともに世界中でたくさん命が生まれ、その子たちの成長にあわせて素晴らしい絵本が生み出されてきた。その後も、紛争・戦争は続いているが、平和が訪れるたびに、絵本文化が芽生える。

今、中国、韓国、ベトナム、台湾で、ちひろ美術館の理念と活動に共感する人たちが増えてきている。絵本を通して、生きていくことの楽しさ、素晴らしさ、感動する喜び、平和への希求を、世界中の人たちと共有・共感できたら、どんなに素敵だろう。美術館の活動がその一助になれば嬉しい。

●次回展示予定 5月14日(水)～7月13日(日)

ちひろと俳句  
同時開催「ちひろと一茶」

季節感あふれる作品を俳句の季語とあわせて展示するほか、「絵本俳句論」を唱えたころの絵本『ことりのくるひ』を紹介しします。また、ちひろが愛した一茶の句とともに、小さいものへの愛情や信州の自然が感じられる作品も展示します。



蝶とあかちゃん 1971年

ちひろ美術館コレクション展Ⅱ  
絵本どうぶつ百態

ヨーロッパやアメリカ、アジア、アフリカなど、世界各国の絵本画家が描き出す動物たちが大集合します。各国の自然や文化の違い、画家の個性によって、さまざまな姿で描き出される動物たちをご覧ください。



フライアン・ワイルドスミス(イギリス) りす 1974年

●2008年度年間展示予定

7/16～9/28

ちひろと世界の絵本画家たち  
—技法のみみつ—



緑の幻想 1972年



エリック・カール(アメリカ)  
「おんどり」1985年

10/1～11/30

ちひろ・旅の絵本  
—ヨーロッパを訪ねて—



風船と街へ出るバスカル  
『あかいふうせん』より 1968年

<企画展>  
生誕100年記念  
茂田井武展



茂田井武 ホフマンのくるみ  
わりになぎょう 1953年

12/3～1/31

ちひろと水墨



あやめと少女 1967年

ちひろ美術館  
コレクション展Ⅲ  
絵のなかの音



セイフ・エディーン・ロウタ(スーダン)  
飛び込む猫 1984年

東京館イベント予定

各イベントのお問合わせ・お申し込みは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。  
ちひろ美術館のHPからもお申込みできます。 <http://www.chihiro.jp/tokyo/event.html>  
TEL03-3995-0612 FAX03-3995-0680 E-mail [chihiro@gol.com](mailto:chihiro@gol.com)

●ちひろ生誕90年記念トーク

①「ちひろの絵本づくり」

蔵富千鶴子(元・至光者編集者)

聞き手：松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)

- 日 時：3月30日(日) 17:00～18:30
- 場 所：図書室
- 参加費：無料
- 定 員：60名(要予約・先着順)

「こどものせかい」の表紙絵を描いていた頃のちひろのエピソードや絵本づくりの思い出を、身近に接していた編集者が語ります。

②対談「ちひろを語る」

松本善明×松本猛

- 日 時：4月6日(日) 17:00～18:30
- 場 所：多目的展示ホール
- 参加費：無料
- 定 員：100名(要予約・先着順)

素顔のちひろについて、夫・善明と息子・猛が語ります。

●ちひろ美術館コレクション展Ⅰ「ロシアの絵本」関連イベント  
スライドトーク「マーヴリナ、ラチョフの魅力」

スライドを用いながらロシアを代表する絵本画家ラチョフとマーヴリナの魅力、安曇野ちひろ美術館副館長竹迫祐子が語ります。

- 日時：4月19日(土) 17:00～18:00
- 場所：図書室
- 申し込み不要

●入館料が一部変更となりました

2008年3月1日よりちひろ美術館(東京・安曇野)では、障害者手帳ご提示の方は、入館料を半額に、また介添えの方は一名まで入館無料になりました。

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14:00より展示室にて、作品の解説や展示のみどころなどをお話しします。4月23日(水)は松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)がお話しします(参加自由)。

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11:00より展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせなどをおこないます(参加自由)。

●G.Wのお知らせ 4/29(火)から5/6(火)までは18時まで開館を延長します。4/28(月)、5/7(水)は休館。

CONTENTS

ちいちゃんの絵本/ロシアの絵本……②③ ちひろ美術館・東京活動報告 武市八十雄講演会/初山滋大回顧展レセプション/上笙一郎講演会……④ ひとことふたことみこと/美術館日記/窓……⑤

美術館/友の会だより No.157 発行2008年2月25日

ちひろ美術館・東京